

ふじさき歯科 デンタルニュース

2014年 No.22



見る、視る、観る、診る



開業して間もなくの頃、患者さんに対する対応、接遇が私を含めスタッフ一同、大変お粗末でありました。そこでJALの客室乗務員のOBの方を招き、その応接の基本を全員で学んだことがあります。さすがに一流の教育を受けた当時の客室乗務員。どこをとっても一分の隙のない態度、応対、身のこなし、言葉遣い。それを一日かかって熱心に教わったことがあります。

それはそれとして、そのトレーニングの一環で、何の前触れもなく、三分間のスピーチを各人が即席で行うことになりました。私は院長ということで一番バッター、さて何を話そうと、とまどうばかり。仕方なく私のモットーという題で話を始めました。その頃私にはモットーも座右の銘も無かったのですが、「私はどんな物事も視点を变えて見るようにしよう」と思っています。」と、突然口をついて出てきた事を話して始めてしまいました。

：以来、その言葉は私にとって「言霊(ことだま)」のごとき存在となり、何十年もの間、私の中で育ち続けております。

「視点を变えて見る」というのはどんなことでしょうか。題名にあるように「みる」という言葉ですら、眺めるという意味の見る。観察視察の見る。見物、鑑賞の観る。医療で診察を意味する診る。と、いろいろあります。

それでは、視点を变えるということとはどんな事でしょうか。私たちは普段自分のスタンス、立場からではなく物事を見る事ができません。写真や絵のような二次元の画像は一方方向からしか見ることができないように。しかし、世の中のほとんど全ての物事は三次元の形を持っています。それをより正確に捉えるためには、二方向からだけでなく上から下から横から裏からあらゆる方向から見なければ正しい認識が出来ないということがわかります。

医療の現場では身体の内부를診るのに昔は二次元画像のレントゲンからしか観察できなかったのですが、現在ではCTレントゲンという、身体の内部の三次元的構造をどの方向からでも視ることのできるレントゲン装置が発達されてきました。歯科でもこれが導入され、今では歯の形、骨の内部構造、骨格、神経などどんな方向からでもどんな切り口でも視ることができるようになりました。(インプラントの手術ではこのレントゲン写真

が絶対必要となります。)

形ある物体を見るということでは、科学の発達によりかなり正確に鮮明に捉えることができるようになりました。しかし本当に視点を变えて視ることが必要なのは物ではなく、人であったり、世の中のことであったり、国であったり、歴史であったり、法律であったり、様々な社会の様相であると思えます。例えば、戦争の大儀や、歴史の解釈、社会のいわゆる常識などなど。これらは見方、視点を变えることとまるで正反対の捉えかたがあったりもするようです。

さらに言えば、三次元の視点だけでなく、四次元、つまり時系列を変えて、昔から現在を見たり、また未来から今を見たりすることもできるのではないかなどと、とりとめもなく思いを巡らせてしまいます。必要なことは、視点を变えて見るという「想像力」ではないでしょうか。

歯学博士 藤崎 真人

